

2021年度 大学院言語文化研究科附属言語文化研究所事業一覧

I. 研究部事業

①研究員による基礎研究

1. 研究題目「廬江何氏鈔本《文史通義》の研究」

研究者 渡邊 大（文学部准教授）

②研究員による共同研究

研究題目 「KIZUNA—言葉と文化の力— (Renewing bonds through languages.)」

代表者 日沖 敦子（文学部専任講師）

分担者 鈴木 健司（文学部教授）

蔣 垂東（文学部教授）

長谷川 清（文学部教授）

大島 丈志（教育学部教授）

石原 次郎（東洋大学教授）

浜垣 誠司（医療法人高木神経科医院理事長）

柴山 雅俊（東京女子大学教授）

宋 洙珍（韓国・仁荷大学校兼任講師）

徐 滔（中国・北京外国語大学准教授）

③研究例会

2021年11月13日（土）14：00～17：40 リモート（Zoom）開催

※「日中韓三国日本語文化に関する国際学術シンポジウム」分科
会内での発表

- (1) 「民族文化の商品化とショービジネス ―雲南省、「吉鑫宴舞」の事例から―

発表者：長谷川 清（文教大学文学部教授）

- (2) 「『袖海編』所記の日本語と日本文化」

発表者：蔣 垂東（文教大学文学部教授）

④紀要発行

2022年3月16日発行『言語と文化』34号

⑤2020年度研究員による基礎研究の報告

1. 研究題目「廬江何氏鈔本《續通志校讎略擬稿》の研究」

研究者 渡邊 大（文学部准教授）

「廬江何氏鈔本《續通志校讎略擬稿》の研究」という題目の下、章学誠の校讎学がどのように形成されたかについて基礎的な作業をおこなった。具体的には、『<文史通義>廬江何氏鈔本』所収の「續通志校讎略擬稿」と「校讎通義」の対校を中心に、王園園「廬江何氏鈔本<章實齋文史通義>研究」など、廬江何氏鈔本に関する先行研究に検討を加えた。成果は、京都大学人文科学研究所共同研究班「章学誠『文史通義』研究」班名で『東方学報（京都）』第95冊に「『文史通義』内篇三訳注」として公にすることができた。今後も新出の資料を通じて、章学誠の校讎学は、『史籍考』の編纂（とその挫折）によって、変化、成熟していったのではないかという構想のもと、伝統的学問の総括としての章学誠の校讎之学について研究を進めていきたい。

2. 研究題目「暗黒の舞台裏：江戸時代の遊郭と病」

研究者 グラハム 児夢（文学部准教授）

日本とイギリスの比較文化論に力を注いだ。即ち、大衆文化として両国が版画という大量生産メディアで如何に売春の存在を表現したのか。18世紀イギリスのウィリアム・ホガスという彫刻師の作品は、3つの角度から問題を直視した。芸術的にも、道徳的にも、医学的にも社会における位が低い娼婦の苦境に気づいてもらうため、画期的ヒット商品として、6枚に校正された版画シリーズが誕生した。美化することができない、梅毒に感染して死亡した主人公、モル・ハッカバウトという田舎娘の残酷物語は、どれほど独特であるのか。浮世絵の世界に似たような話があるはずだという想定から研究しているが、現時点では江戸時代の華やかな吉原をめぐる庶民向きの版画文化の遺産であるにも関わらず、日本版のホガスは無さそうである。果たしてそうなのか、あきらめずに日本版のホガスを探求し続けている。

3. 研究題目 「MOOCs and Second Language Education

MOOCと第二言語教育」

*MOOC=Massive Open Online Course (大規模公開オンライン講座)

研究者 鷺麗美知 ゴラナ（文学部教授）

Coursera学習プラットフォームで提供されている〔Learning to Teach Online〕コースを受講した。

Future Learn学習プラットフォームで提供されている〔Introduction to Applied Linguistics〕コースを研究した。英文科の専門科目と統合してみた。

British Journal of Education (2020) vol.9 (1) に論文を掲載した。
 (“A case for blended learning : integrating massive open online courses
in traditional degree programmes” p.105-123)

MOOCと第二言語教育について2021年度も継続する予定である。

⑥2020年度研究員による共同研究の報告

研究題目 「KIZUNA—言葉と文化の力— (Renewing bonds through
languages.)」

代 表 者 日沖 敦子 (文学部専任講師)

分 担 者 鈴木 健司 (文学部教授)

長谷川 清 (文学部教授)

大島 丈志 (教育学部教授)

浜垣 誠司 (医療法人高木神経科医院理事長)

柴山 雅俊 (東京女子大学教授)

徐 滔 (中国・北京外国語大学准教授)

令和2年度の共同研究は、「KIZUNA—言葉と文化の力— (Renewing
bonds through languages.)」というテーマをもとに、各分野から研究された。

それぞれの研究成果は、特別講義や研究例会、紀要『言語と文化』第
33号にて発表された。

・「物語絵本・絵巻に関する基礎的研究」

(日沖)

在外絵入り本ほか海外の絵巻やアニメーションの描写についての理解
と考察を深めるとともに、今年度から本学所蔵となった屏風絵の挿絵と
本文の位置づけを行い、報告した。

- ・「宮沢賢治作品に関する精神医学的アプローチ—解離性障害を視点に一」
(鈴木・大島・浜垣)

※「言語と文化」第32号に論文掲載

※第2回研究例会にて報告

- ・「近代東アジア地域における人の移動と文化の交流・動態に関する研究」
(長谷川・徐)

近代東アジア地域における文化の交流を人の移動という観点から考察した。大学院言語文化研究科開設科目「比較文化特論」「比較文化特殊研究」の受講者に対して「日中近代思想・文化交流について」と題する特別講義をオンライン授業形式によって実施した（実施日時：2020年12月23日（水）9：00～12：00）。

⑦2021年度日中韓三国日本語文化に関する国際学術シンポジウム

2021年11月13日（土） Zoom開催

主 催：文教大学文学部

共 催：北京外国語大学

韓国日本語文化学会

文教大学大学院言語文化研究科

文教大学大学院附属言語文化研究所

主催者：宮武 利江（文教大学文学部長）

日中韓国際学術シンポジウム全体プログラム

	時 間	スケジュール	備 考	
全体会議	10:30 ~ 10:35	主催者挨拶	宮武利江・文教大文学部長	
	10:35 ~ 10:40	共催者挨拶	周 異夫・北京外大日語学院長	
	10:40 ~ 10:45		朴 蕙成・韓国日本語文化学会長	
	10:45 ~ 11:25	開催校学長挨拶&講演	中島 滋・文教大大学長	
	11:25 ~ 12:05	基調講演	白井啓介・文教大言語文化研究科長	
	12:05 ~ 12:25	事務連絡		
	17:45 ~ 17:50	閉会式	阿川修三・文教大言語文化研究所長	
分科会	招待発表	13:25 ~ 14:00	言語①分科会	安部朋世(千葉大)、橋本 修(筑波大)
			言語②分科会	尹 松 (中国・華東師大)
			文学分科会	楊 炳菁 (中国・北京外大)
			文化・社会・教育分科会	権 赫仁 (韓国・光云大)
	研究発表	14:00 ~ 14:30	各分科会第1発表	配信本部： 全体会議：4号館416教室 言語①：4号館413教室 言語②：4号館412教室 文 学：4号館411B教室 文化・社会・教育：4号館411A教室
		14:30 ~ 15:00	各分科会第2発表	
		15:00 ~ 15:30	各分科会第3発表	
			休 憩	
		15:40 ~ 16:10	各分科会第4発表	
		16:10 ~ 16:40	各分科会第5発表	
		16:40 ~ 17:10	各分科会第6発表	
17:10 ~ 17:40	各分科会第7発表			

研究部より

日沖 敦子

大学院付属の研究所として、先生方や院生のために少しでもお役に立つよう努めてまいりました。阿川修三所長、坂上葉子氏、佐々木洋子氏（言語文化研究所）らのお力添えあって、当初の計画通り、研究活動を無事に終えることができ、感謝しております。

今年度も昨年度に引き続き、共同研究のテーマは「KIZUNA—言葉と文化の力—」となりました。このテーマをもとに、各分野（日本文学、日本語教育、英語教育、中国語学、社会学など）から様々な研究が進められました。多文化時代にふさわしく、多角的な視点でそれぞれの研究が遂行さ

れ、今年度の紀要にも興味深い研究論文や研究ノートが寄せられました。

本年11月13日には、文教大学文学部主催、言語文化研究科・言語文化研究所共催「2021年度日中韓三国日本言語文化に関する国際学術シンポジウム」をオンラインにて開催いたしました。このシンポジウムは、日本の言語と文化を幅広い視野と多面的な観点から比較検討することを目的とした学術フォーラムで、2013年の第1回から開催されています。今年は8回目の開催となりました。講演2本を含む全体会の後、言語、文学、文化の3分野からなる4つの分科会に分かれ、招待発表を含む31本の発表がありました。本学の教員も参加し、各分科会で報告しました。オンライン開催ということもあり、例年以上に多くの参加者が議論に加わり、日本語・日本文化研究の動向などをめぐって活発な意見交換がなされ、親交を深めました。

このような充実した研究活動を遂行できるのも共同研究および基礎研究にご参加下さった先生方、ご論文をお寄せ下さった先生方、そして、国際シンポジウムや研究会にご参加くださった皆様のご協力あつてのことです。

今後も言語文化研究所へのご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

II. 研修部事業

①夏期公開講座報告

(1) 英語教育夏期講座

対 象：中学校・高等学校英語科教員または教員志望者。

埼玉県内在住または在勤の方。

目 的：英語教育についての理解を深める。

期 日：令和3年8月3日（火）

会 場：Zoom利用によるオンライン開催

参加者：49名

講義・発表内容

講義① 「Learning from Yone and Mitsu: A Trip through Tim」

グラハム 児夢 (文学部准教授)

It begins in the year 1950. An American educational film introducing a Japanese family is released for use in American classrooms. Fast forward to the early 1990s and the film is repackaged for pure entertainment in a Sunday afternoon special on Japanese commercial television, the theme: “This is how Americans once saw us.” This instructor, having videotaped the segment with his boxy new VCR, transformed Japanese Family into a lesson for Bunkyo freshmen on writing scripts for film narrations, a lesson repeated every December for nearly three decades. In 2020 the instructor found the original film online and was somewhat surprised to discover it was 20 minutes long, not a mere five as videotaped off television.

This talk is about unexpected findings resulting from an exercise where freshmen in 2020 were asked to explain what was cut out of this film of seventy years ago, and why.

講義② 「スピーキング力の指導法について：理論と実践をつなげてみよう」

藤井 彰子 (国際基督教大学准教授)

日々の授業の中で、「この活動はどのようにスピーキング力の向上につながるのだろう」と教員も学習者も疑問に思うことがあるでしょう。本講座ではスピーキング力の仕組みを理論的に理解してから、教室活動やタスクベースなどの指導法について

改めて考えます。例えば、スピーキングの認知プロセスは複雑ですので、一つ一つのステップを分析することで、活動との対応が見えてきます。また、スピーキングの多面性を活用して多様な授業活動を行うことができます。スピーキング力について一緒に考えましょう。



(2) 日本語教育夏期講座

対 象：日本語教育に携わっている方、または日本語教育に関心のある方。

埼玉県内在住または在勤の方。

目 的：日本語教育についての理解を深める。

期 日：令和3年8月3日（火）

会 場：Zoom利用によるオンライン開催

参加者：79名

講義・発表内容

講義①「日本語教育における異文化コミュニケーション
—技能実習生「介護職種」を例に一」

神山 英子（三重大学特任講師）

昨今の日本国内における日本語教育は、学習者の多様化とともに、求められる教育内容も多様化しています。今回は、日本語教育における異文化コミュニケーションについて、増加傾向

にある日本で就労する介護に関わる外国人人材を例に、考えたいと思います。

講義②「多文化共生と人間関係を紡ぐ日本語教育への挑戦」

加納 陸人（文教大学名誉教授）

日中で共同作成した中等教育用第二外国語教科書『好朋友』（全5巻）が中国の日本語教育の現場で広がりを持ちつつあります。本教材は「多文化共生」と「人間関係の温暖化」を理念にストーリー漫画を取り入れ、文化を学ぶ視点の獲得、多文化社会を生きる資質を育てることに重点が置かれています。本講座では『好朋友』に込められた意義を通して、文化の捉え方、日本語教師や学習者の新たな学びの可能性について考えていきます。



(3) 中国語教育夏期講座

—中国語学習の新しい視点—

対 象：中国語教育に携わっている方、又は中国語学習者。

埼玉県内在住または在勤の方。

目 的：中国語教育・学習についての理解を深める。

期 日：令和3年8月2日（月）

会 場：Zoom利用によるオンライン開催

参加者：33名

講義・発表内容

講義①「高校の中国語の授業を体験してみようⅣ ～3つの“de”を考える～」

星野 勝樹（伊奈学園総合高等学校教諭）

新しい元号「令和」のイニシャルは、日本語では「R」ですが、中国語では「L」で表記されます。現代中国語の音と日本漢字音には少なからず対応関係があり、「L」から始まる中国語は、日本語では「ラ行（R）」に写されます。では、「R」から始まる中国語は、どのように写されるのでしょうか？本講義では、現代中国語の音と日本漢字音にはどのような対応関係があるのか考えたいと思います。

講義②「中国語の流行語から考える中国社会の変化」

王 岩（城西国際大学准教授）

本講座では、中国における流行語に着目し、これまで中国社会で用いられた面白い流行語を紹介し、その表現に隠れている社会や人々の文化意識の変化について考察する。

時事・政治、テクノロジー、経済、文化・教育、社会・生活等の分野の流行語を取り挙げ、流行語の意味や流行した理由を紹介する。そして流行語が生まれた背景や状況をふまえて、中国社会の変化や今後の趨勢について考察する。



(4) 書写書道教育夏期講座

対 象：小・中学校国語（書写）、高等学校書道担当教員。

学校教育としての書写書道教育に関心のある方。

目 的：書写書道教育についての理解を深め、指導技能の向上を図る。

期 日：令和3年8月2日（月）

会 場：Zoom利用によるオンライン開催

参加者：17名

講義・発表内容

A（書文化）コース

※今年度非開講

B（学校教育）コース

講義①新しい教育課程について

講義②学習指導要領概説（小中高）

講義③新たな動向・視点と指導上の留意点

講師：豊口 和士（文学部教授）

小・中学校国語科書写、高等学校芸術科書道の指導に必要な事項について、最新情報に基づいて学びます。新しい教育課程の概要、学習指導要領における小・中学校国語科書写及び高等学校書道のポイント、学校教育に関わる新たな動向とそれに伴う新たな視点からの指導上の留意点などについて概説します。本年度は、オンラインならびに1日での開催につき、技能（実技）については扱いません。



②異文化体験講演会

期 日：2021年12月22日（水）16：30～18：00

Zoom利用によるオンライン開催

講演者：グジョン ジョナタン 氏（文学部専任講師）

演 題：「世界のお祝い、私のご馳走」

概 要：年末年始といえば、お祝いという概念が頭に浮かびます。

世界には色々なお祝いがあり、そのきっかけは様々です。

人間は何故祝うのか、お祝いについて、普遍的側面と相違

点を一緒に見ていきたいです。また、いくつかの国で暮ら

した私の異文化体験を例に挙げながら、国それぞれの独特

な祝い方について個人的な視点を述べたいと思います。

参加者：39名



研修部より

グラハム 児夢

新型コロナウイルスに晒された世界から抜け出すことができない2021年。その恐怖に屈服せず、2020年の経験で鍛えられたオンライン講座のノウハウを生かし、各講座数を三つから二つにしぼり、2021年度の夏期講座をZoomで行うことにしました。リピーターの顔が見えなかったことも、懇親会ができなかったこともありましたが、Zoomの方式でも夏期講座における「言葉と文化の力」という理念は弱まりませんでした。

夏期講座は8月2日、3日の真夏に行われ、埼玉の最高気温は38.7度でした。Zoomの利点といえば、受講者が家で気持ちよく受講したに違いないと思われます。

その上、一つ以上の講座に参加することも気軽に出来ました。

英語教育講座の講演者は、国際基督教大学の藤井彰子先生と筆者でした。藤井先生はスピーキングの技能を如何に向上させれば良いのかという教法がご専門で、スピーキングの習得における神秘について講義されました。より良い授業のために49名が参加しました。筆者は「日本の家族」という1950年のアメリカの子供向け教育用映画を紹介しました。長年教材として大学一年生向けの英作文授業で使っていましたが、学生達はその映画に映る占領時代の模様と戦時中の反日プロパガンダの悪影響を揉み消す効果には気がつきません。

日本語教育講座が特に目立ったところは、まず参加者の数でした。なんと79名でした。三重大学特任講師の神山英子先生が、外国人人材に日

本語能力を身につけさせる問題について講義してくださいました。特にその多様化の中の介護職種にフォーカスを当てておられました。次の講演者は本校の名誉教授、加納陸人先生でした。テーマは日中で共同作成した中等教育用第二外国語教科書『好朋友』という日本語教科書シリーズでした。「人間関係の温暖化」を理念に、この教科書の目的達成のお話をされました。講義終了後、参加した多くの卒業生が加納先生と交流し、まさに教え子が世界のいたるところにいる「桃李天下に満つ」を痛感しました。

中国語教育講座は伊奈学園総合高等学校の星野勝樹先生による講義からスタートし、テーマはローマ字表記でした。日本語の「令和」はRで書くのに、中国語のピンインはLと書きます。現代中国語の音と日本漢字音との比較が興味深いものでした。その次の講義は城西国際大学准教授王岩先生で流行語が如何に現代社会の政治経済や文化の最新姿を反映させるのかということを面白く取り上げました。中国語教育講座の参加者数は33名でした。

書写書道教育講座は、学校教育コースだけが行われました。本校の豊口和士先生が、一般教育における書写関連の最新情報を22名の参加者にお伝えしました。途中、自ら筆をとり、オンライン上でも分かりやすいように、実践されていました。

最後に、外国語学科に新任されたグジヨン・ジョナサン先生により、「世界のお祝い、私のご馳走」をテーマに異文化体験講演会が行われました。講演会の予定日はちょうどクリスマスの三日前で、先生が出身地のマルセイユ港の神秘的なイメージを背景に、活気に満ちた比類のない

スタイルで、フランスやアメリカやマレーシアそれぞれの国の祝い事の定義とあり方に関して講演をしました。ムードが季節にぴったりフィットでした。言語文化研究所のスタッフによる宣伝作戦が大成功して39名が参加しました。

新記録ではないかと思われます。お疲れさまでした！